

---

# 匂薔茉莉

今室綾花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

匂蕃茉莉

### 【Zコード】

Z5574M

### 【作者名】

今室綾花

### 【あらすじ】

寡黙な彼からのプレゼントは変わった花木。  
これからも、一緒に生きていくつ。

夕刻、ふと庭の隅を見ると小さな花の木を見つけた。

「あれ？」

俺の腰の高さの木に、白と紫の小さな花が咲いている。  
一つの木に色の違う花が咲くなんて……

「ねえ、この花……」

「匂<sup>におい</sup>蓄茉莉<sup>くわいじゆばり</sup>」と言つんだよ。茉莉花の一<sup>イ</sup>種だ。この花を見た時、何故だかお前の顔が浮かんで……思わず買つてしまつたんだ

「え？ 俺？」

驚いて振り返る。

オレンジの夕日の逆光で彼の表情はよく分からぬけれど、ポリ。と人差し指で頬を搔いた。

それは、本氣で照れている時に彼がする仕草だ。

プレゼントなんて誕生日にしか貰つた事はないし、庭に植えてい  
るバラの花すら直接手渡された事はない。

朝、いつもキッチンカウンターに無造作に切り花を置いて、

「綺麗<sup>うつく</sup>だったから寝室<sup>しゆ</sup>にでも飾つておけ」

面倒くさそうに言ひながら玄関へ向かう彼の後ろ姿を見てこると、

ポリ。と、頬を搔く。

耳を真っ赤にして。

俺の指に刺さらないようにとバラの棘を全部取ってくれている。

そこまですれば手渡せばいいのに絶対手渡そとはしない。

彼との出会いは3年前、祖父が経営していたフランチャイズのコンビニだった。

本社の人間で、前担当者と交代したと言つて店に来たのだ。

それから毎朝、彼はコンビニに来た。

缶コーヒーとタバコを買って、ボソッと「お疲れ」と言つて店を出て行く。

俺の顔をチラリと見ても無表情のまま。

そんな彼の表情を崩したくて天気の話題を振るが、

「ああ」

と、相槌ひとつで店を出て行く。

コンビニやスーパーを運営している大会社の人間だから、きっと有名大学出の堅物サラリーマンなのだろう。と解釈していた。

ある日、寝坊してバタバタと出勤し、いつもの天気の話題を振らなかつた俺に一瞬表情を変えて無言で店を行つた。

そして仮眠の為に夕方帰宅途中、スコールのような雨が降り始めた。

天気予報を見ていなかつたから傘を持つていなかつたと走り始めた時、彼の車が目の前に止まつた。

「乗れ」

と、車の中へ入れてくれ、

「ほら」

新品のタオルを手渡された。

「すみません。でも、タイミングいいですね。タオルなんて」

「雨が降るつて予報だつたのに傘も持たずに出勤していただろ?」

「朝? 何でそれを知つてるんですか?」

「あ、いや……」

この男が一瞬ストーカーのように思え、身構えると、

「今日は少し早めに駐車場について……君と……天気の話をしてみようと思つたんだ。なのに君は天気の話題を振つてこなくて……思い返したら、傘を持つていなかつたから天気予報見てなかつたのかと思つて……」

「……」

「夕方には雨が降るつて言つていたから……タオルを買って……」

顔を真つ赤にして、下を向いて、頬をポリポリ搔きながらボツンボツンと話している。

堅物サラリーマンの真つ赤な顔を見ていると可笑しくて、可愛く

て、俺は声を上げて笑った。

「わ、笑う」と無いだろ？ たまには……話してみたいと思つたんだ

だ

「そうですか。すみません」

まだ笑う俺を真っ赤な顔をして見ると、

「これから仮眠か？ また、深夜に出るんだろ？」

「はい。まずは飯作って……」

「料理するのか？」

「はい。俺、得意……」

ぎゅるるるるるる……と、彼の腹の音が車の中に響いた。

「あ……」

更に真っ赤になつた彼は、と外を向き、俺はまた声を上げて笑つた。

「一緒に食べませんか？ 作りますよ」

「い……いいのか？」

驚いて俺を見た彼に笑い、

「はい。じゃ、そこの角曲がって……」

それから彼との交流が始まった。

時間が合えば食事に誘われ、俺もたまに家に招いたりと交流が続  
き、いつの間にか恋人同士として過ごしていた。

祖父が突然の心筋梗塞で亡くなり、俺が相続したコンビニは、交  
通の便がいいと本社直営にするよう彼が尽力してくれた。

おかげで経営は本社に任せることが出来て今は彼と一緒に住んでい  
る。

両親を早くに亡くしていて祖父も亡くなり、天涯孤独になつた俺  
にプロポーズをしてくれたのだ。

ベッドの上では饒舌に愛の言葉を囁くくせに、シラフの時は激し  
く無口で照れ屋なのだ。

まあ、そんなギャップが楽しいし、そんな彼が好きだからいいん  
だけど……やはり手渡しをして欲しい。

たまに、「いつ手渡すんだよ」と、バラの花にぼやいてはみるが、  
彼の頬を搔く仕草と真っ赤に茹であがつた耳の色が好きだから何も  
言わない。

そんな彼が、俺の顔が浮かんだから買ったと言いつつ、少々眉をひそめて不安げに俺を見ていた。

何故不安になる？

何年一緒にいる？

俺の気持ちが分からぬのか？

お前から貰うものなら、石こうひとつだって嬉しいの。

「こいつ買ってきた？ 知らなかつたよ」

俺は笑いながら彼の身体に寄り添つて手を握つた。

「外回りしている時に見つけて、さつき、お前が買い物に行つている時に植えたんだ。この花は紫から白に色が変化していくんだって

わ」

「へええ……。ねえ、これはプレゼントだよね？」

俺は彼に抱きついて笑いながら顔を見上げた。

「プレゼント……？」

「違うの?..」

「いや……お前に買つてきたんだ」

「それはプレゼントだろ?..」

「まあ…… もうひと皿」

爆発するのではないかと思ひ程に赤く染まつた彼の頬に手を添えた。

「素直に言えぱいいのに。プレゼントだつて。何で言えないのでほら、言つて?..」

「ふ……」

「プレゼント」

「ふれ……、ふ……、ふ……」

何でそこまで言えないのか不思議で、可笑しくて、

「そつか。プレゼントじゃないだ。なんだ。残念」

わざと拗ねた顔をして身体から離れた俺の腕を彼が掴んだ。

「ふ……プレゼントだ！ お前にプレゼントだ！」

怒鳴るように叫んだ顔が超可愛いくて、

「大丈夫。プレゼントだってきちんとと言えなくとも、バラの花を手渡しきれなくとも、俺はこの花の色の様には気持ちは変わらないよ

一やりと笑って彼の身体に抱きついた。

「そんのは分かってる。……俺も……お前と同じ気持ちだから

ふう。と息を吐きながら彼は俺を抱きしめた。

「よく言った。えらいぞ？ はい。『褒美』

俺は彼の頬にキスをしてあげた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5574m/>

---

匂薔茉莉

2010年10月10日00時12分発行